川原寺の調査

—第127-3次

1　はじめに

本調査は、史跡川原寺跡内における明日香村村営下水道管敷設工事に伴う調査である。当該地は、1950年代に周辺を発掘し（奈文研『川原寺発掘調査報告』1960年。以下『報告』）、1995年に下水道工事に関連して、推進工法の発進竪坑位置を検討するため8ヶ所の試掘調査をおこなった（川原寺1995-1次。『年報1997-Ⅱ』57～66頁）。今回は、1995年の調査結果を受けて、発進竪坑を設置する工事に伴う立会調査であった（A・C・D区）。ところが、発進竪坑設置後の推進工法による下水道管敷設工事を進めるうちに、管が何らかの埋蔵物にあたって推進できない状況となった。そこで、その地点を発掘調査によって確認することになった（B1・B2区）。

調査は、2003年10月から2004年2月の間に断続的におこない、都合6日間を要した。調査の総面積は14.4㎡である。各調査区の位置などは以下の通りである（図123）。なお、調査には明日香村教育委員会の協力を得た。

A　区：西渡廊北側。東西2.0m×南北2.2m。
B1区：西渡廊北側。東西1.1m×南北2.9m。
B2区：西渡廊北側。東西1.0m×南北2.0m。
C　区：西僧坊基壇上。東西2.1m×南北1.9m。
D　区：僧坊西北入隅部。東西1.0m×南北1.0m。

2　検出遺構

A・C・D区は、1995年の調査区と重なる位置にある。いずれも黄褐色を呈する川原寺の整地土層をのぞいては、明瞭な遺構はなかった。

B1区　西渡廊基壇北縁の3m北方にあり、小子房推定地内に位置する。層序は、①コンクリート擁壁、②青灰色粘質土、③焼土、④黄灰色粘質土、⑤暗青灰色粘質土、⑥黒色粘土、⑦青灰色粘土である。遺構は⑤、⑥層上面で検出した。

⑤層上面で検出した遺構は、石敷SX670がある。直径10～20cmの石を並べるが、あまり密ではない。石敷上面の標高は116.2m。この標高は、西僧坊の基壇や西渡廊基

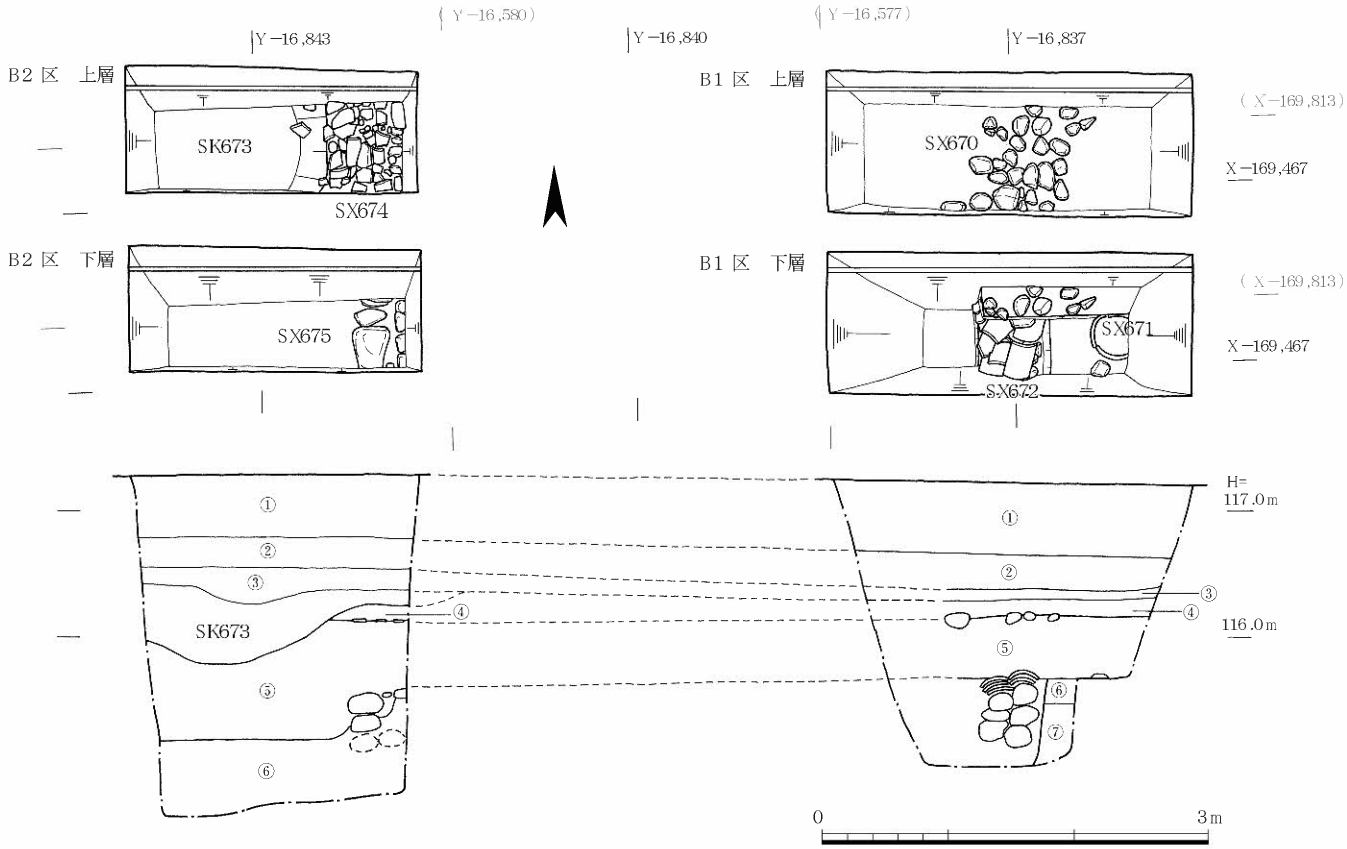

図126　第127-3次調査　平面図・南壁断面図　1：60

壇南縁の石列(1995-1次F-4区)と近く、川原寺伽藍の時期のものと想定できる。

⑥層上面で検出した遺構は、枠状の遺構SX671と石詰暗渠SX672がある。SX671は平瓦4枚を円形に並べたもので、直径約35㎝。井戸枠などに利用されたと推定されるが、掘形はない。SX672は西半分は壊されているが、幅約0.7m、深さ0.7m以上の掘形をもち、その中に人頭大の石を詰め川原寺創建期の平瓦で蓋をしている。

B2区　B1区の3m西にある。B1区同様、小子房推定地内に位置する。層序はB1区と同じである。遺構は④、⑤、⑥層上面で検出した。

④層上面で検出した遺構は、土坑SK673がある。調査区より大きいため規模はわからない。埋土に焼土やはつり屑を多く含み、ごみ捨て穴と考えられる。

⑤層上面で検出した遺構は、瓦敷SX674がある。調査区西半はSK673によって壊される。凸面を上に向けた大小の瓦を敷いている。瓦には、丸・平瓦以外にも川原寺創建期の軒丸・軒平瓦がある。磚も含む。B1区の石敷SX670と標高が同じであり、同時期の遺構と考える。

⑥層上面で検出した遺構は、SX675がある。人頭大の石を上下に2段以上積み、その下にさらに石を積む。B1区のSX672のような石詰暗渠と推定される。

3　出土遺物

A・D区からは遺物は出土していないため、B区の遺物について述べる。

土器類　少量の土師器・須恵器が出土したが、遺構の時期を特定できる資料はない。

瓦磚類　調査面積は狭いが、大量の瓦磚類が出土した。軒丸瓦は601Bが1点、軒平瓦は、651B1が2点と、651Dが1点が出土。丸・平瓦は、それぞれ51点(28.2㎏)、136点(65.23㎏)出土した。多くは創建期のものである。ほかに、これまでの川原寺の調査でも出土している、上面に波形を彫り込んだ大型矩形磚が1点出土している。

瓦敷SX674から出土した軒瓦は、すべて荒坂瓦窯産である。丸・平瓦は、須恵質で丁寧な調整を施す荒坂瓦窯産が大半であるが、他に凸面布目平瓦や、凸面に格子叩き目や横縄叩き目を残す平瓦もある。これらの瓦はいずれも川原寺創建期のものである。ただし、創建期の瓦窯、川原寺瓦窯(本書118頁)で生産されたと推定される丸・平瓦は1点も出土していない。　(瓦磚類:筧　和也)

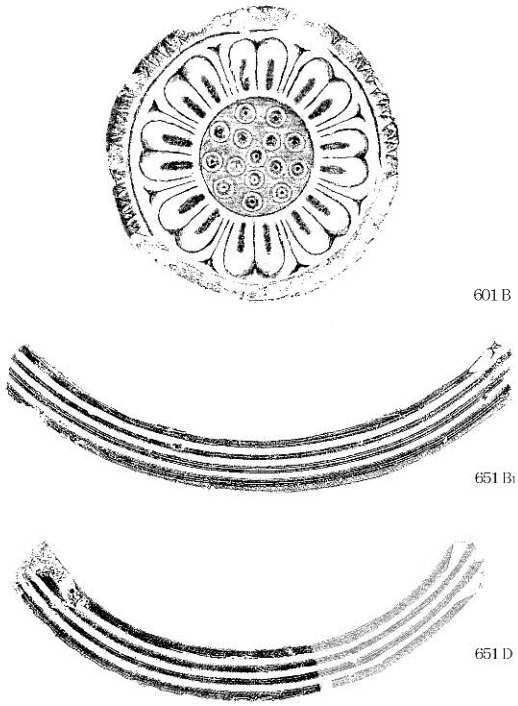

図127　第127-3次調査出土軒瓦　1:5

4　まとめ

上層遺構と小子房　西僧坊の調査では、基壇土の下に石敷や瓦敷を確認しており、基壇補修時に石や瓦を基壇土の下に敷いたもの考えている(『報告』)。今回の調査で石敷SX670・瓦敷SX674の上にある④層は、黄褐色を呈するキメの細かい締まった土で、基壇土として遜色ない。今回の調査地は『報告』では小子房の存在を想定しており、上層遺構は小子房の基壇である可能性が高い。

下層遺構　1957年の調査で、西金堂の東では、75㎝ほどの厚い沼状地形堆積土中で2本の石組暗渠を検出している。この暗渠は、中心伽藍一帯に広がる沼状地形を埋め立てて造っており、川原寺創建期以前の遺構と考えられている(『報告』)。今回検出した暗渠SX672・675も、約50㎝の厚い沼状堆積の下にあり、層位関係は西金堂東の暗渠と同じである。したがって、両者は同じ性格のものであると考えられる。しかし、SX672は暗渠の蓋に川原寺創建期の平瓦が用いられており、創建以前の遺構とは考えられない。具体的な時期などの問題が残ったが、今後の周辺の調査を待ちたい。　(前岡孝彰)